

# ニュースレター

No.40

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE

## 2016年度創立記念「外国人墓地礼拝」に列席して

イザヤ書11章6節「小さきわらべが、彼らを導く」

研究所長 村椿 真理

今年度「外国人墓地礼拝」に参加した折り、案内された第14区、C.B.テンネー先生ご家族の墓碑を見ながら、そこに眠る令息ポールの名の下に、イザヤ書の聖句が記されていたことに気づき心に残った。そこには9月27日に誕生、9月27日に召天と刻まれていた(1910年)。出産で母グレースが亡くなり、おそらく死産でなく、赤ちゃんだけ産まれて、しばらくしてその子も母を追うように亡くなっただけ。長男の誕生、これは喜びに満ちた出来事である。先生ご夫妻はもとより皆がどれだけ楽しみに待ちわびたことか。しかし結果は暗転。一気に悲しみの淵に突き落とされた。その時、残されたテンネー先生の心中は、いかなるものであったか。わたしは息の詰まる思いがした。またその後、捜真で行われた葬儀は、どれほど寂しいものであったのだろうか。

しかしテンネー先生は息子の名の下に、何とあのイザヤ書を刻まれた。「終末の、救いの完成する時には、狼、子羊、豹も小ヤギも仲良くし、平和を得て、幼子が彼らを導く」。そんな時が訪ずれるのを自分は信じるというのである。そして、あの日生まれた幼子も、地上では何ら生まれてきた使命を果たしていないように思われるが、決してそうではないのだと。ポールにも大切な役割があって、彼は誕生し、生まれてきたと、そう信じるのだというのである。先生は感謝して、小さなご遺体を、まだ27歳という妻の懐に預け、14区に共に葬られたのだと、墓標を見ながら考えさせられた。

テンネー先生は悲しみを癒すために帰米されたが、1年後再来日され、何と東京学院の理事長、神学校長になると、まもなく中等部の移転、私立中学関東学院の設立を果たされていく。何故あの悲しみの後、再度三度目の来日を先生は果たされたのか。弱りつつ渾身の泣き声をあげる我が子を抱きしめ、先生は神に祈ったに違いない。しかし、実は先生の方が逆に、その幼子に励まされていたのかもしれない。悲しくて、とてもやりきれない思いを越えて、彼が再び立ち上れた秘密は、実は愛妻とポールのおかげであったともいわれる。先生がこの2人によって、まさに強い父親になれたからである。

横浜は、悲しみの地だったのではなく、むしろ愛する妻子の眠る、懐かしい約束の地だったのである。今日私たちもこの学院に召され、奉職しているわけだが、建学の祖であるこうした人々の姿を見ながら、本学の基督教研究を、いよいよ心して進めていかななくてはならないと考えさせられた。

# 関東学院大学でのサービス・ラーニングに向けて

## 奉仕・ボランティア教育研究グループ活動報告

建築・環境学部教授 リサ・ゲイル・ボンド

サービス・ラーニングは最近教職員や文科省が意識するようになった言葉である。サービス・ラーニングとは一体何だろうか。これはおそらく多くの人々の疑問だろう。

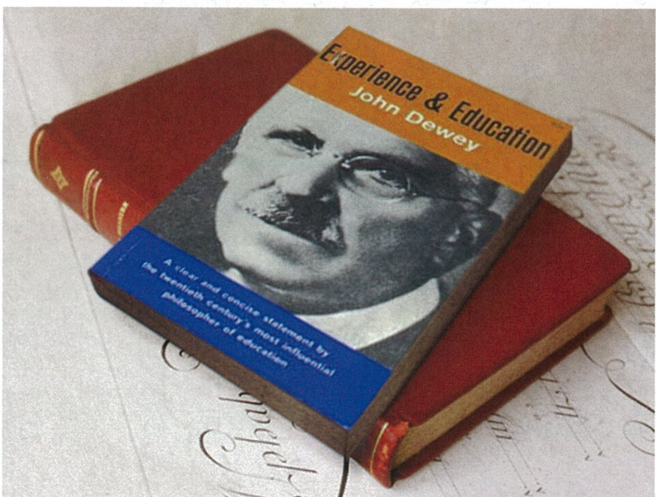
サービス・ラーニングの歴史はおそらく多くの人々が思うより長いものである。遡ること1916年、デューイ(John Dewey)は、学生が地域での奉仕活動に従事すればより効果的に学び、よりよき市民になるであろうと述べ、この奉仕活動をカリキュラムに組み込むことを主張した。この考え方が教育界で普及するにつれて、多くの学校がカリキュラムやプログラムにサービス・ラーニングを採用するようになった。

## サービス・ラーニングとは

サービス・ラーニングは、学生が教室で学んだことを、他者のためになる活動を行うことによってコミュニティの場面で実践・応用する教育法である。サービス・ラーニングはボランティア活動やコミュニティ・サービスとは異なる。ボランティアは多くの場合、必要とする人々をボランティアが「助ける」「単発の」イベントである。コミュニティ・サービスもボランティア活動に似ているだろう。コミュニティ・サービスはしばしば大人や教員が活動を選択し、誘導することで行われ、学生と家族がそのイベントを支援するものである。活動は参加者とコミュニティにとって大変有意義だが、「有限」の性質をもち、場合によっては教室で学んだ内容や科目とは全く関連性がないものになることもある。

サービス・ラーニングはそうしたものではない。それは学生に自分たちのコミュニティの問題、あるいはより国際的、グローバルなレベルの問題を解決する力をつけさせるものである。それは学生主導のプロセスであり、学生は特定の問題や地域について学んだ後、改善に向けてどのように行動すべきかを検討し、その後、実践してみる。学生は教員の指導の下で研究と行動を自分たちでイニシアチブをとって活動を行う。学生には振り返りと評価の時間があり、これによって学びのプロセスが継続する。そして学生は学びのプロセスと行動を学校と家族とコミュニティとで共有する。サービス・ラーニングは時間のかかるプロセスであるが、このプロセス自体が重要なのである。このプロセスを通じて、学生は教室で学んだ知識を実際に使ってみることで、多くの視点から問題を議論し、検討すること、問題を解決すること、そして学びのプロセスと努力をふりかえり／評価することを学ぶのである。

サービス・ラーニングを通じて学生は将来の職業生活に備えるために、そして積極的に活動するコミュニティのメンバーとして参加するための、多くのスキルを習得する。さらに、教室では学生がカリキュラムと、学生生活の「今」を彼らのコミュニティの中でどのように活かしようかを具体的に理解できるように教員が支援するのである。教育機関とコミュニティの双方にとってもサービス・ラーニングは有益である。その理由は、両者の間にはパートナーシップが確立され、時の経過と共にこれらが有意義で持続的な「リレーションシップ」関係になりうるからである。

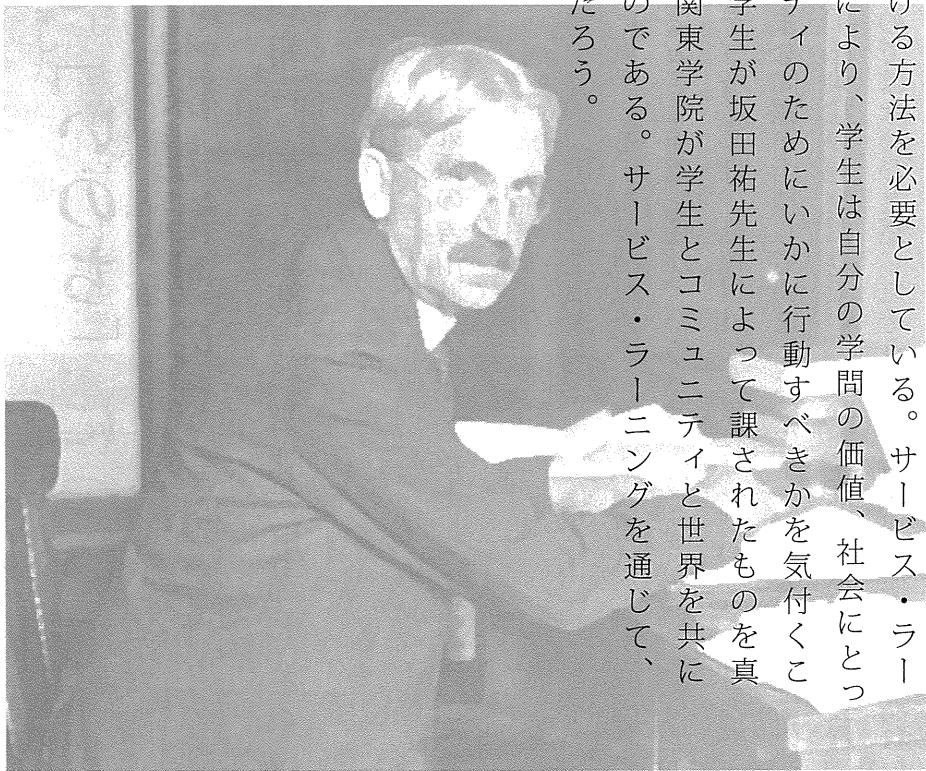


## キャンパス・コンパクト

アメリカでは、大学レベルで現在一〇〇校以上の私立公立大学がキャンパス・コンパクトに参加している。キャンパス・コンパクトは、コミュニティ・ライフを改善し、市民としての責任そして社会的な責任について学生を教育する大学の能力を深めることよつて、大学の公的な役割を推進する組織である。大学は、教育を深めるとともに、コミュニティ・ライフを改善するような形で責任ある市民になるべく学生を教育する努力をする必要があると考えられ、それは多様な民主主義にとつて欠かせない主体であり、設計者であると考えられている。キャンパス・コンパクトは1985年にブラウン大、ジョージタウン大、スタンフォード大の学長らと合衆国教育委員長らによつて設立された。1980年代の半ばに、メディアは大学生を物質主義的で自己中心的な、隣人を助けることよりもお金を儲けることにばかり関心をもつ存在として描いた。キャンパス・コンパクトの設立者らはこうした学生像は誤りであると信じていた。学長らは多くの学生がコミュニティ・サービスに参加しており、その他の学生も適切な奨励・支援システムがあればこの方針に従うだろうと考えたのだった。キャンパス・コンパクトは大学がそうした支援システムを構築するために創設されたのである。今日ではキャンパス・コンパクトのメンバーである大学の98%にはコミュニティ・パートナーシップがあり、90%以上の大学はそのサービスがないし市民的な活動へのとりくむことを教育理念の中に含めている。これらの大学はその知識と設備を強い絆を持ったコミュニティの構築と次世代の責任ある市民の教育を支援するための活動に提供している。日本の大学がサービス・ラーニングをそのカリキュラムとプログラムに組み込み始めるにつれて、キャンパス・コンパクトもまた教職員と機関のための優れた支援組織になるものと思われる。

## サービスラーニングの時代へ

サービス・ラーニングは理想であり、今まさにその時代がきたのである。私たちのコミュニティはコミュニティにある問題について理解し行動するための知識とスキルと熱意のある若者を必要としている。私たちの教室はアナログな現実の世界よりもサイバーでデジタルな世界とよりつながりがちな学生を動機づける方法を必要としている。サービス・ラーニングを通じた学びの機会を与えられることにより、学生は自分の学問の価値、社会にとつての自分の存在意義、そして自分のコミュニティのためにいかに行動すべきかを気付くことができるのである。これは関東学院初代の学生が坂田祐先生によつて課されたものを真に具体化する教育手法である。そしてこれは関東学院が学生とコミュニティと世界を共に学び奉仕することを通じて結びつける方法なのである。サービス・ラーニングを通じて、私たちは皆「世界に奉仕」することができるだろう。



ジョン・デューイ John Dewey (1859 - 1952 )

アメリカ合衆国におけるプラグマティズムを代表する思想家である。また米国では機能主義心理学に貢献したことで知られている。教育学者でもあったデューイはサービス(奉仕)を基本としたラーニング(経験学習)を主張した。1916年に「体験的教育」を提唱し、1925年にはデューイの最も形而上学的省察といわれる『経験と自然』を発表。知識を教授することだけが教育ではなく、体験を通して獲得する学びにこそ真の教育があるという「行動による学習」論を展開した。

# アジア・アフリカで感じた「いのち」について

## — 国際産業保健活動の経験から —

いのちを考える研究グループ研究会報告 理工学部専任講師 尾之上さくら

2016年9月2日、いのちを考える研究グループでは関東学院大学・関内メディアセンターにて、独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所の吉川徹先生をお招きしてご講演いただきました。

### 1. 国際保健活動とは何か

講演は、吉川先生が産業医科大学の医学生の際に東ティモールで結核患者の診療や病原体の検出方法の技術移転等の医療ボランティアとして参加した際に大きな衝撃を受け、いのちについて深く考えるきっかけとなったとお話から始まりました。当時の東ティモールは、結核以外にもマラリア、下痢症などの感染症が流行しており、内戦や環境問題などさまざまな問題が山積していました。先生は、医療活動の中で現地の病気に苦しむ人や、その死に接するたびに、感染症の治療だけでいいのか、生活環境の改善や食糧不足を改善しなければ根本的な解決にはならないのではないかと感じたそうです。臨床研修医を経て訪れたベトナムでは、農業労働者の生活改善支援の取り組みを通じ、労働生活改善がいのちを支えるために必要と考えられ、労働科学研究所に就職されました。90年以上も前に設立された労働科学研究所には、労働者の労働生活を支えるための技術が根付いていて、先生のその後の研究活動に多いに役立つたことでした。そして、先生は、アジア、アフリカにおける国際的な産業保健（国際保健）を専門とするようになられました。国際保健が扱う問題は、感染症対策に加え、栄養問題、労働衛生問題、避難民保健、母子保健、災害医療など幅広い領域に渡っています。実際に、先生が携わられたアジアでの仕事は、東ティモールやベトナムを始めネパール、バングラディッシュ、ラオス、スリランカなど17カ国にのびります。

先生が行われている労働者の労働生活改善対策には、国際的に共通の研修ツールが用いられています。これは、対策指向型チェックリスト（アクションチェックリスト）を使って働く人たちが意見交換を行い、自ら職場の良いところに気づき、さらに改善すべき点をみつけるものです。労使で実施するもので参加型職場改善活動ワークと言います。実施後は定期的なフォローアップを行い、さらに現場の職場、労使や地域の共同体に好事例を展開していきます（グッドプラクティスアプローチ）。これらの方法を用いて、東アフリカのブルンジ国では国際協力機構（JICA）の現地プロジェクトとして医療現場での職場改善活動を行い、西アフリカのリベリアでは、WHOの専門家としてエボラ出血熱の感染症流行や職業感染対策に対応されました。

### 2. アジア・アフリカで感じた「いのち」から「生きる」を考える

講演の最後に、先生は次のように話されました。

「これまでの仕事や生活のなかで「いのち」を考える機会が多くありました。特に、身近に「感じられる死」と「感じられない死」に関連した出来事との遭遇です。「死」について考えることは「どのように生きるか」と同じです。何の目的で働き、大切な家族を支え、地域で生きるか。「生」の長さや「死」の迎え方は、地域や労働生活環境で異なります。「どのように生きるか」は「死」の感じ方と大きく関係するでしょう。」

この言葉はとても印象的でした。私たちは、病気や負傷、身近な人の死に直面したとき以外には、なかなか「いのち」について考えないものです。つまり、死を感じたときに生きることを考えます。では、どのように生きるかということになります。この答えとして、先生から、家族や友人などと普通に日々の生活を営み、そのことに喜びを感じ、感謝を忘れずに生きることが大切であるというメッセージをいただきました。



吉川 徹  
2015年より独立行政法人労働安全衛生総合研究所(JNIOOSH)国際情報・研究振興センター・上席研究員、労働災害調査分析センター・センター長代理、過労死等調査研究センターを併任。専門は国際保健、産業安全保健(人間工学、職業感染症学、産業精神保健学等)。

## 茶の湯にみるキリスト教の精神 国際的貢献に向けて 客員研究員・国際文化学部非常勤講師 スムットニー 祐美

2010年より「キリスト教と日本の精神風土」研究グループの客員研究員として学ばせていただいております。茶道学と異文化コミュニケーションが専門分野です。本研究所では、16世紀後期にキリスト教伝道のために来日した、イエズス会宣教師がみた茶の湯に光を当て、キリスト教との関わりを文化的見地から研究しています。

当時、日本では茶の湯文化が最盛期を迎えておりました。豊臣秀吉は茶の湯を保護し、武将や豪商はもとより、一般市民に至るまでに広めました。それを支えたのが千利休です。利休は、



これまで饗宴や美術鑑賞として用いられてきた茶の湯を簡素化して、その代わりに修行という要素を採り入れました。わび茶の形成です。

このような時代背景の中、宣教師らは茶の湯に遭遇したのです。彼らは日本人と交流するために礼儀作法として茶の湯を学びましたが、精神性にも注目していました。イエズス会文書には、茶の湯を用いた宣教方針や修道院内の茶室規則などが収録されています。

今後も宣教師らの認識した茶の湯についての研究を深めて参ります。日本伝統文化の茶の湯には、キリスト教の精神性と共通した思想があることを、世界中の方々に伝えることができると存じます。

## 平和創出への新たなる思い

所属・人間共生学部教授 山田 留里子

本年4月より、関東学院大学人間共生学部に着任すると同時に、「キリスト教と文化研究所」の一員とさせて頂きました。心より感謝申し上げます。研究所に参加させて頂けるということは、現代社会の諸問題に対し、宗教がどのように取り組み、またどのように貢献していくかを知ることができる大いなるチャンスでもあると考えております。

さて、本年10月14日～15日、中国の北京大学におきまして“人文传统与方法分梳：多元文化視野下的中国语言文学”というテーマでの国際学術会議がありました。私の専門が中国語教育ですので、“语言学：多语言的探求”というSessionにて、中国語教育への新たな教授法の研究成果を発表致しました。

今回の国際会議を通し、最も見識を深めたことがあります。それは、急速なグローバル化に伴い人々の価値観も多様化している現代において、そのバランスを取るための、そしてお互いの着地点を見いだせるための「コミュニケーション力」が求められているという点です。どの研究が優れているのかというような競争ではなく、研究者・教育者が“協働”し何ができるのかということを探求することに、平和構築のための礎があるということを再確認致しました。

その尊い平和創出の活動を展開されている研究所を讃えると共に、キリスト教への新たな視座を与えて下さったことに、心から感謝申し上げます。

